



# 龍満山古墳群

## ～1号墳～

2003年9月

香川町教育委員会  
高松市水道局



# 龍満山古墳群

～1号墳～

2003年9月

香川県教育委員会  
高松市水道局

# 序文

香川町内の中央部より北東部にかけての丘陵地に、万塚古墳・八王子古墳・東赤坂古墳・横岡山古墳等の古墳が点在しています。

今回発見された古墳は、高松市水道局の水路埋設に伴い発見されたものであります。横岡山古墳の反対側斜面に位置していること、丘陵北端の斜面に剣山（龍満山の別称）古墳が存在していたこと、地形的にも香東川の氾濫地域に面することから位置はともかく、龍満山に古墳の存在は予想されることであります。事実、龍満山古墳群1号墳に隣接して複数の古墳の存在が確認されています。

龍満山古墳群1号墳は6世紀から7世紀にかけてのものであり、古墳時代後期のものであります。特色として、一石ごとに目地があり石室構築と版築構造が見られるとともに川原石が多く使われています。

幸いにも、天井石の落下により盗掘もほとんど無く、須恵器・土師器・馬具・刀子・鉄釘等の鉄製品・耳環・小玉・管玉・切子玉等の装飾品が出土しました。

現実に発掘の様子を見たり、その結果を見ると、いにしえの人々の生活の一端が垣間見え、夢が膨らんできます。

この報告書は、平成14年8月26日から試掘調査に入り、平成15年9月30日に終了するまでの約1年間にわたる調査の記録であります。

今回の発掘に関しては、高松市水道局並びに高松市教育委員会を中心となって取り組んでいただきお礼の申し上げようありません。

最後になりましたが、この調査・発掘を実施するにあたり、献身的にご協力いただいた関係機関・関係者の皆様方をはじめ、記録の記述と編集に尽力いただいた、高松市教育委員会には厚くお礼申し上げます。

平成15年9月

香川町教育委員会

教育長　妹尾　長

## 例　書

1 本報告書は、高松市水道局が施工した岩崎～浅野口径 500・700 mm 葉水管右設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県香川郡香川町川東下東立満に所在する龍満山古墳群のうち 1 号墳の調査報告を収録した。

2 発掘調査および整理作業については、香川町教育委員会が実施し、高松市教育委員会が協力した。

3 事業費は、高松市水道局が全額を負担した。

4 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)

香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

片桐孝浩（香川県教育委員会）

5 龍満山古墳群の調査は、下記のとおり実施した。

【試掘調査】 平成 14 年 8 月 26 日～8 月 29 日

香川町教育委員会社会教育課社会教育主事 藤田浩一郎

高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員 大嶋和則

【発掘調査】 平成 14 年 9 月 18 日～11 月 15 日

香川町教育委員会社会教育課社会教育主事 藤田浩一郎

高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員 川畠聰

讃岐文化遺産研究会 中西克也

【整理作業】 平成 14 年 12 月 2 日～平成 15 年 9 月 30 日

発掘調査と同じ

6 本報告書の執筆・編集は、第 1 章を藤田、第 2 章を川畠、第 3・4 章を中西が担当した。

7 本報告書掲載の写真撮影には、杉本和樹氏（西大寺フォト）の協力を得た。

8 本文の挿図として、国土地理院発行 5 万分の 1 地形図「高松南部」および香川町都市計画図 2 千 5 百分の 1 「香川町都市計画図 N o - 3」を一部改変して使用した。

9 発掘調査で得られたすべての資料は、香川町教育委員会で保管している。

10 本報告書の高度値は海拔高を表し、第 2 図の方位は真北を表し、他の図面の方位は磁北を表す。

## 目 次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 地理的環境・歴史的環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	
第1節 調査前の状況	4
第2節 墳丘	4
第3節 埋葬主体	7
第4節 出土遺物	8
第4章 まとめ	
第1節 古墳の年代	19
第2節 古墳の規模と構造	20
第3節 石室内埋葬順序	22
第4節 古墳の特徴について	22

## 挿図目次

第1図 香川町位置図	1	第9図 出土遺物実測図(1)	15
第2図 周辺遺跡分布図	3	第10図 出土遺物実測図(2)	16
第3図 遺跡位置図	5	第11図 出土遺物実測図(3)	17
第4図 地形測量図	6	第12図 出土遺物実測図(4)	18
第5図 玄室・羨道部平・立面図	9	第13図 須恵器変遷図	19
第6図 土層断面図	11	第14図 龍満山古墳群地形測量図	20
第7図 敷石検出状況図	12	第15図 須恵器出土分布図	22
第8図 遺物出土位置図	13		

## 図版目次

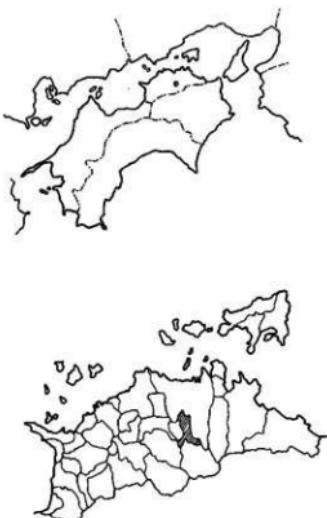
図版1 遠景(南西から) 遠景(南東から) 調査以前	図版4 西側側壁 玄室 奥壁	図版6 石室完掘状況 (敷石撤去後) 西側側壁
図版2 墳丘土層断面(A-B) 墳丘土層断面(C-D) 遺物出土状況	図版5 敷石 石室完掘状況 (南西から)	図版7 遺物 (敷石撤去後) 東側側壁
図版3 遺物出土状況 西側側壁 東側側壁	石室完掘状況 (北西から)	図版8 遺物 図版9 遺物

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成13年度に、高松市水道局より岩崎～浅野口径500・700mm導水管布設工事に伴い埋蔵文化財包蔵地の照会が香川町教育委員会にあつた。当教育委員会では、川東下東立満において周知の埋蔵文化財包蔵地が一ヶ所あることから、高松市水道局と協議を行った結果、平成14年8月に包蔵地の性格を把握するために試掘調査を実施することになった。なお、当教育委員会には文化財専門員が不在のため、高松市教育委員会から文化財専門員派遣の協力を受けた。

試掘調査の結果、包蔵地は横穴式石室をもつ古墳であることが判明したため、再び高松市水道局と協議を重ねた。高松市水道局の費用負担のもと、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意した。なお、調査対象となった古墳に隣接して新たに古墳が2基確認された。これらを「龍満山古墳群」と命名し、調査対象のものを1号墳、次いで2号墳・3号墳と呼称した。



第1図 香川町位置図

### 第2節 調査の経過

発掘調査は、平成14年9月～11月にかけて実施し、試掘調査同様に高松市教育委員会から文化財専門員等の派遣を受けた。また、人力掘削や出土鉄器保存処理等の直接調査に関わる作業については、高松市水道局が実施した。

調査は竹林の伐採に始まり、次いで現地形の平板測量を実施した。掘削作業は、すべて人力により、墳丘を覆っている表土層の除去を行い、横穴式石室の上面を検出した。ここで、墳丘および石室上面の平板測量を実施した。横穴式石室は、すでに天井石が失われていたため、石室内の堆積土を順次掘り下げ、約1.80mで床面を検出した。石室実測図を作成するとともに、墳丘の一部を断ち割ってトレンチを入れ、墳丘の断面観察を実施した。これら1号墳の発掘調査と併行して、香川町教育委員会では、独自に2号墳・3号墳の地形測量を実施した。

発掘調査中に、地元小中学生の見学を受けたほか、11月9日には現地説明会を実施し、地元では古墳への関心が高まりつつあった。これを受けて、高松市水道局から古墳の保存について、当教育委員会に打診があり、協議を重ねた結果、石室の約3/4を現状保存することで合意した。そのため、これ以上の発掘調査は行わず、石室奥壁側の撤去時に工事立会を実施した。

平成15年度には、導水管布設工事の周辺整備工事に伴って、古墳の復元工事が高松市水道局によって実施される予定であり、当教育委員会では、説明板を設置して見学者への対応を図ることとしている。

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

香川町は、香川県のほぼ中央に位置すると同時に、地形的に見れば高松平野の南端部にあたる。そのため、香川町の北部は平野沖積地帯、南部は阿讃山脈から連なる丘陵地帯となっている。この高松平野は、香川町の西端を南北に流れる香東川によって形成された扇状地で、東西20km・南北16kmの規模をもつ。一方、阿讃山脈を縫うように流れてきた香東川は、丘陵地帯が切れる部分から北流し、瀬戸内海へと注ぎ込んでいる。

龍満山古墳群は、阿讃山脈から北西方向に派生した独立丘陵上に立地する。この丘陵は、龍満山または横岡山と地元で呼ばれ、山頂部の標高は146.9mである。古墳群は、丘陵北西部の南西に開く谷間斜面に位置し、標高は91m前後である。

### 第2節 歴史的環境

香川町では、現在のところ、旧石器・縄文時代の遺跡や遺物は発見されていない。

弥生時代でも、明確な遺跡はまだ発見されていないが、舟岡山や新池で石庖丁や石鏟が採集されている。さらに、香川町の西側に位置する香南町では、弥生時代後期の集落跡である岡清水遺跡が所在することから、これから香川町でも弥生時代の遺跡が発見される可能性は高い。

古墳時代になると、明確に遺跡が認められるようになる。前期では、双方中円墳または前方後円墳と考えられている舟岡山古墳が独立丘陵上に築かれる。また、舟岡山の東隣には、前期から中期と推定される舟岡古墳が所在する。現在、浅野小学校では、この古墳から出土したと伝えられる剣拔式石棺を見ることができる。

一方、古墳時代でも後期後半になると、横穴式石室をもった古墳が多く築かれるようになる。香川町内の中央から北東部にかけての独立丘陵上に、万塚古墳・八王子古墳・東赤坂古墳（町指定史跡）・横岡山古墳（町指定史跡）などが築かれている。

古代の香川町は旧香川郡に属し、町内の北半部は大野郷に、南半部は井原郷に比定されている。香川郡には秦氏が多く居住していたことが、平城京から出土した木簡などから窺い知ることができる。しかし、今のところ古代の遺跡は発見されていない。

中世になると、香川町内でも武士階級の城館が築かれる。香東川流域の平野部には、大野北城・大野南城・龍満城・乾城・箭造城が所在している。さらに、高松空港南側の山間部には鳥屋城がある。香川町以外では、香東川西岸の平野部に由佐城・行業城などがあり、南部の山間部には山城である音川城・東谷城などがある。

近世になると、讃岐国（香川県）は生駒親正によって統治される。生駒家が4代で転封となつた後は、香川町を含む讃岐国東部は、松平頼重が初代となった高松藩に属し、明治維新を迎えることとなる。

### 《参考文献》

香川町教育委員会『龍満城跡』2000年

香川町誌編集委員会『香川町誌』1993年

香川県教育委員会（財）香川県埋蔵文化財調査センター

『国道193号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 岡清水遺跡』2001年



1 龍満山古墳群 1号墳	16 矢野面古墳	31 龍満山城跡	46 鳥屋城跡
2 石舟池古墳群	17 万坂古墳	32 吉光城跡	47 音川城跡
3 三谷石舟古墳	18 八王子古墳	33 佐賀神社古墳	48 東谷城跡
4 三谷城跡	19 東赤堀古墳	34 池内城跡	49 好広城跡
5 通谷遺跡	20 百相坂遺跡	35 横井城跡	50 東神内古墳群
6 三谷三郎池西岸窯跡	21 舟岡山古墳	36 由佐城跡	51 円蓋寺古墳群
7 平石上 1号墳	22 舟岡古墳	37 乾城跡	52 向井山城跡
8 平石上 2号墳	23 大野北城跡	38 築造城跡	53 錦野城跡
9 平石上 3号墳	24 大野南城跡	39 行業城跡	54 本村古墳群
10 瘤山 1号墳	25 中田井城跡	40 罔跡	55 大龜古墳群
11 瘤山 2号墳	26 若富神社古墳	41 高野神社古墳	56 尾越古墳
12 日山頂古墳	27 剣山古墳	42 茶園墓跡	57 王佐山城跡
13 北山古墳群	28 横岡山古墳	43 大坪窯跡	58 中山田遺跡
14 雨山山頂古墳	29 清谷古墳群	44 城所山 1・2号墳	59 中山田古墳群
15 雨山南遺跡	30 油山古墳群	45 岡清水遺跡	60 上佐山東麓古墳群

第2図 周辺遺跡分布図 (S:1/50,000)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査前の状況（第3図）

1号墳の存在する丘陵は、高松平野を南北に流れる番東川から東側へ約800m離れた所にあり、ほぼ南北方向に細く延びる独立丘陵である。この丘陵は南側に標高146.9mの山頂があり、ミニ四国霊場が設けられている。北側に延びる稜線は緩やかに低くなるが北端において再び若干高くなっている、その頂は標高107.4mであり、剣山神社が鎮座している。山頂から東方向に延びる尾根の中腹には横穴式石室を持つ横岡山古墳が所在し、丘陵北端の斜面には剣山古墳があった。しかし、剣山古墳は現在では使用されていたと思われる石材が散在するのみである。丘陵北部は香川第一中学校・高松市水道局浅野浄水場・ホテルによる地形の改変が著しい。

1号墳は丘陵ほぼ中央の西斜面に位置し、現況はクヌギや松などの雑木と竹が混生する荒地であり、墳丘状のわずかな高まり及び石室石材と思われる花崗岩の巨石が露出していた。古墳の下方には幅約10mの平坦部があり、かつては小さな池があったと言われている。さらに下方には数段の平らな面が確認でき、この池の水を灌漑用水とした水田が営まれていた。このように石材の露出と後世の削平をかなり受けていることから、当初この古墳がかなり破壊されていることが予想された。

調査にあたっては地形測量図及び試掘調査の結果を踏まえ、確認できる石室石材を基準に等高線上及び主体部に直交する計2本の畦を設定し、表土剥ぎから開始した。調査区は工事対象範囲内で墳丘の高まりよりも広く設定し、その規模は南北約10m、東西約16mを測り、平面形は不整な長方形を呈する。調査を進めていくと、義務部が東側の工事対象範囲外に延びていることが判明したため、地権者と高松市水道局・香川町教育委員会の3者で協議の結果、東側に約3.7m<sup>2</sup>拡張することになった。

調査以前に露出していた花崗岩の巨石はその大きさから天井石の石材であった可能性があるが、後世の跡跡があり原位置を保っていないので調査の段階で取り除いた。

### 第2節 墳丘（第4・6図）

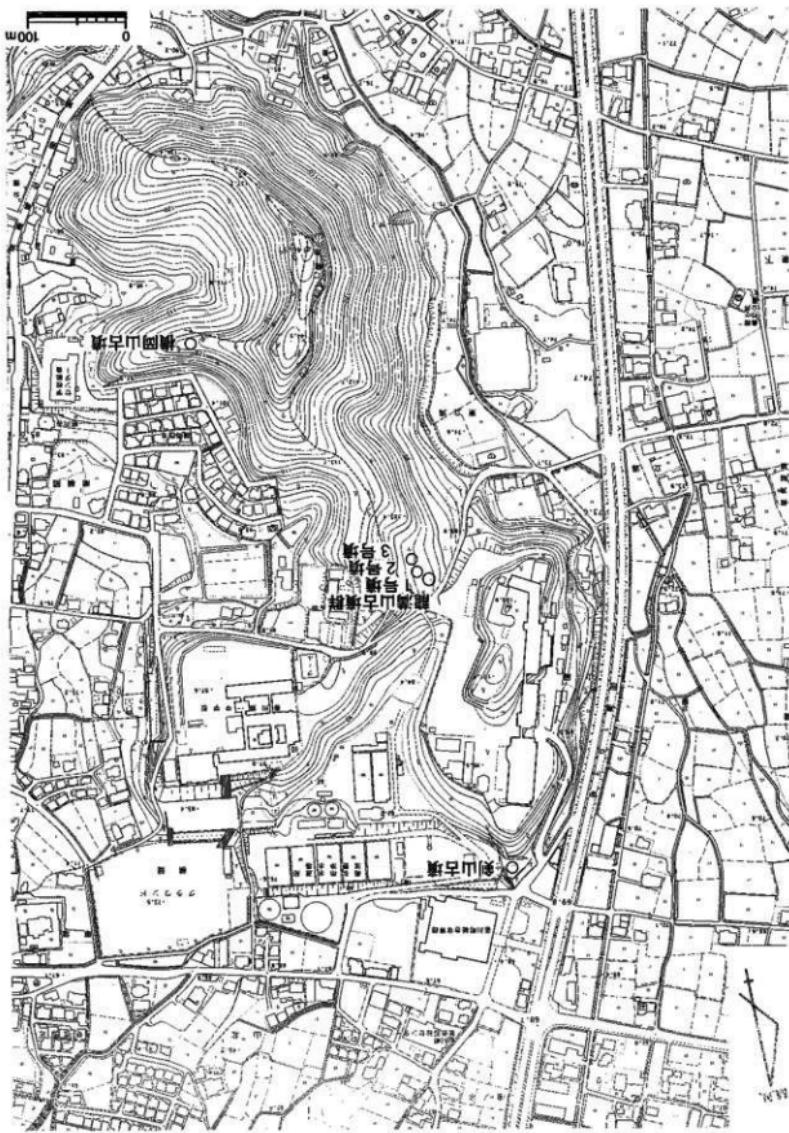
古墳は西斜面の標高91.5m前後で検出した。墳丘は地形測量図において確認され、標高91.00～92.00m余のコンターラインが古墳の周辺で外側に弯曲しており、明らかに自然地形と異なっている。墳丘は円墳と考えられ、その規模は古墳の東と西側にあるコンターラインの変換点を基準にすると直径約15.00m、下方の平坦面からの高さ約2.00mを測る。

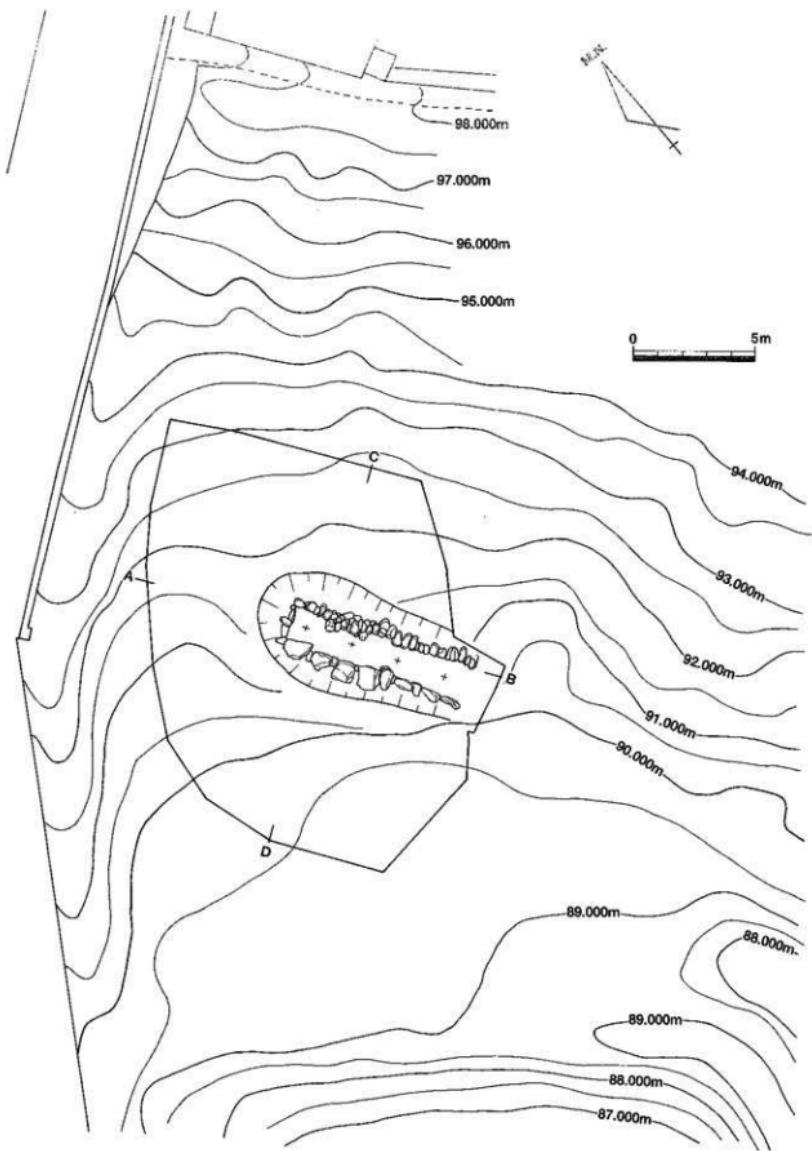
発掘調査では石室を中心に直交する2本の畦を設定した。石室の主軸に沿う南北方向の畦をA-B、それに直交する東西方向の畦をC-Dとし、土層堆積の観察を行った。その結果、墳丘はかなり削平されているが、花崗岩の地山上に盛土があり、石室の周辺部にかなり細かい版築の痕跡が確認できた。

第6図土層断面図A-Bでみると、石室の奥壁から1.50m西側に墓壙掘方である大きな落込みがあり、その埋土は灰白色花崗土バイラン土とぶい褐色花崗土バイラン土の互層からなり、非常に固くしまる版築土層が見られる。さらに2.00m西側までの範囲は土層23～26による盛土がある。これらの土層を掘り込むように土層14・15が堆積しており、地形測量図の西側にあるコンターラインの変換点とほぼ同位置にあたっており周溝の可能性も考えられる。

土層断面図C-Dでみると、A-Bと同様に石室の両壁の外側に灰白色花崗土バイラン土とに

第3圖 地籍位置圖 (S:1/5,000)





第4図 地形測量図 (S:1/200)

ぶい褐色花崗土バイラン土の互層からなる墓壙掘方が確認される。しかし、東側側壁の裏込めは不規則的な堆積を呈している。蓋板より東側は地山の花崗岩上にほぼ平行する盛土が見られる。石室西側の墓壙頭方より西側は土層 27 ~ 34 のにぶい黄褐色花崗土バイラン土と灰白色花崗土バイラン土を交互に固め版築土層としている。その西側には土層 23・24・26 の盛土が見られる。西端に検出された土層 11・12 は全く粘性のないラミナ状堆積を呈しており、近代の池の痕跡と思われる。

石室構築と版築（盛土）との関係は古墳を現状保存する都合により完全に解明できていないが、わかる範囲で次のように想定できる。土層断面 C-D では石室の東側（斜面上方）のみに花崗岩の地山が確認でき、西側には花崗岩がないが、土層 36 はかなり古い年代の自然堆積であり地山に相当すると考えられる。まず地山を整形し、現墳丘裾部から一回り小さい墳丘を版築状に形成し（土層 19・27 ~ 34）、さらに現墳丘裾部近くまで土を積み上げた後に墓壙を掘削する。その墓壙内に石室基底石を据えて土層 35 を裏込め状に詰め、上部の側壁石材を構築して土層 13 の灰白色花崗土バイラン土とにぶい褐色花崗土バイラン土を交互に裏込め状に突き固める。この版築土層の 13 は現地表直下まで確認でき、側壁上部まで同じ工法で造られたと考えられる。石室東側（斜面上方）と比較して西側（斜面下方）の版築は丁寧に造られている。天井石までの盛土を行った後、墳丘の成形をするための盛土を行ったと考えられる。

### 第3節 埋葬主体（第5・7・8図）

主体部は両袖式の横穴式石室で、等高線にほぼ平行に構築され、長軸主軸が N-31°-W を取り、概ね南東に開口する。石室全長は 7.85 m を測り、床面の標高は 89.75 m 前後である。

石室内の埋土は側壁に使用されていた石材が多量に落ち込んでいたため詳細に分層することができなかつたが、ほぼ水平な堆積を呈していた。

玄室の規模は全長 4.10 m、幅は奥壁側と玄門側で 1.70 m、中央で 1.80 m を測り、現存する側壁の高さは 1.30 m である。奥壁は 1.45 × 0.80 以上 × 0.30 m と 1.25 × 0.85 以上 × 0.15 m を測る 2 個の花崗岩と川原石の小石で構築される。花崗岩の下位は床面から 0.30 m 下の位置にある。奥壁と側壁は側壁が奥壁を挟み込むのではなく、それぞれのコーナー部を接するように据えられている。

側壁は花崗岩と川原石を織り交ぜて一段ごとに構築されるが、東側側壁と西側側壁の構築方法が若干異なっている。東側側壁は基底石に奥壁寄りの 3 石が花崗岩、玄門寄りの 2 石が砂岩の巨石を並べ、2 段目より上部は偏平な川原石を小口積みと横長積みの 2 工法により積み上げている。現存する側壁の最上位の石材は斜面上方からの土圧により石室内側にずれているが、それ以外の壁面はほぼ垂直である。西側側壁は奥壁寄りの 2 石と玄門寄りの 2 石の基底石に東側側壁よりやや小さい花崗岩を使っているが、中央では上部と同じ大きさの偏平な川原石を基底石として並べている。上部の側壁は偏平な川原石と花崗岩を小口積みと横長積みにより積み上げているが、中央部から玄門までには 2 段目ないし 3 段目を積み上げた上に 0.90 × 0.70 × 0.80 m 以上の花崗岩の巨石が積まれている。奥壁側の最上部にある板状の花崗岩は天井石と考えられるが、その原位置は保っていない。巨石の間には川原石が詰められている。西側側壁の壁面はほぼ垂直である。それぞれの側壁の基底石は奥壁と同様に床面より 0.30 m 埋められており、西側側壁中央の基底石はほとんど床面より下になっている。それぞれの側壁には詳細に見ると一石ごとに目地が確認でき、石室構築と版築（土層 13 層）の関連を考える参考となる。すなわち、側壁の一石を積み

上げるごとに裏込め状に土層 13 層を突き固めるという工程が推測される。

床面には敷石が検出されたが、中央を境として敷石の様相が異なる。中央から奥壁までの 2.15 m の範囲は 5 ~ 30 cm 大の川原石が敷き詰められ、そのレベルは奥壁側で標高 89.80 m、中央で 89.75 m であり羨道側に緩やかな傾斜で下がっている。奥壁から 0.20 m 離れた床面中央の位置に  $0.48 \times 0.23 \times 0.06$  m を測る楕円形の石材が敷石直上に確認され、棺台になる可能性がある。中央部から玄門の間は 0.20 ~ 0.58 m を測るやや大きな川原石が部分的に敷かれている。そのレベルは標高 89.80 m 前後である。このような敷石の違いは玄室の空間利用の違いから生じたと考えられる。

床面の下位において造構の有無を確認する目的で敷石を取り除いて掘り下げたが、排水溝などの造構は検出されなかった。敷石以下の土層はほぼ水平堆積を呈し、上層より灰白色花崗土バイラン土・明褐色花崗土バイラン土・にぶい黄橙色花崗土バイラン土である。

玄門部は東西の玄門立柱石が玄室の側壁より 0.25 m 張り出す位置に据えられ、玄門幅は 1.15 m を測る。東側の立柱石は長さ 0.95 m の方柱状の川原石を立て、その上に 2 個の川原石を小口積みしている。立柱石の下端は床面より 0.40 m 下であり、上面は羨道部の基底石と玄室内で奥壁脇の基底石の上面と同じレベルである。西側の立柱石は長さ 1.12 m の方柱状の川原石を立て、その上に 1 個の川原石を積んでいる。立柱石の下端は床面より 0.70 m 下であり、石の半分以上は埋められている。立柱石の上面は羨道部の基底石と玄室内で奥壁から 2 番目の基底石の上面と同じレベルであり、側壁に積まれた花崗岩の巨石の下面ともほぼ同レベルである。

羨道部は全長 3.10 m、玄門側の幅 1.40 m、羨門側の幅約 1.60 m を測る。東側側壁は 2 個の川原石・1 個の花崗岩の基底石と小口積みされた川原石を積み上げ、立柱石と面を揃える位置に据えられている。西側側壁は 4 個の基底石のみ残存する。玄門側の 2 石は玄室側壁と面を揃える位置に据えられているが、羨門側の 2 石はやや外開き気味に並べられている。床面は羨門方向に緩やかに低くなっている。玄門より東 1 m の位置に 6 個の川原石が 1 列に並べられており、仕切石の可能性が考えられる。

玄門の両側に立柱石を張り出して立てることにより玄室と羨道を明確に区別している。このことから玄室は両袖式石室である。しかし、西側側壁では側壁に対して立柱石のみが張り出しており、疑似両袖式の要素も持っている。つまり、この古墳の石室は両袖式と疑似両袖式の折衷であると言える。

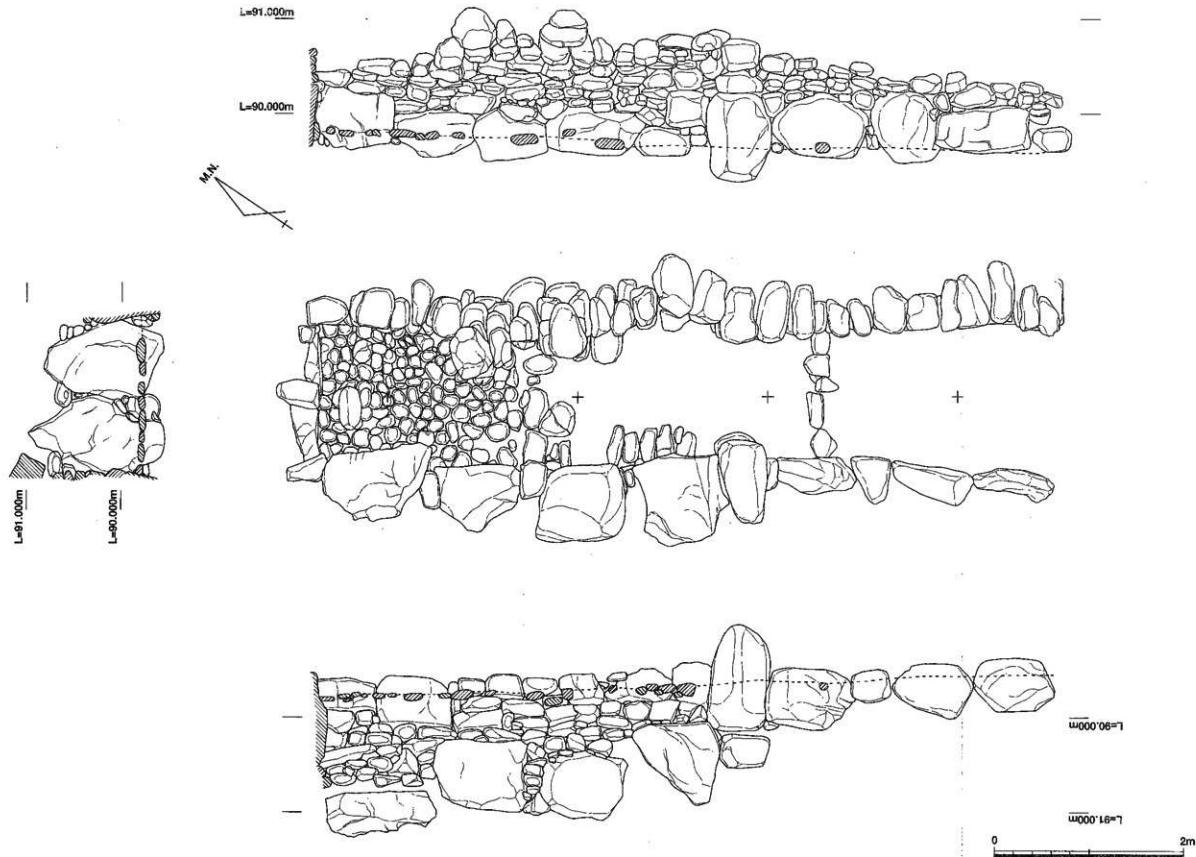
出土遺物の分布を見ると、玄室北東部の床石直上に須恵器杯身・同蓋・同高杯が出土し、北西部から中央部にかけての敷石直上でガラス製の小玉多数が出土する。玄門付近では須恵器杯身・同高杯・同脚付長頸壺・同脚付短頸壺・同短頸壺・土師器杯・耳環 3 点・馬具・刀子・鉄釘が出土し、羨道部に平瓶 2 点が出土している。東側側壁脇の敷石の下よりハソウが 1 点出土し、3 点ある耳環の内の 1 点は西側側壁の脇に並べられた方柱状の敷石を取り除いた後より出土する。このように遺物の出土は奥壁付近と玄門付近と羨道中央の 3ヶ所に集中している。

#### 第4節 出土遺物（第 9 ~ 12 図）

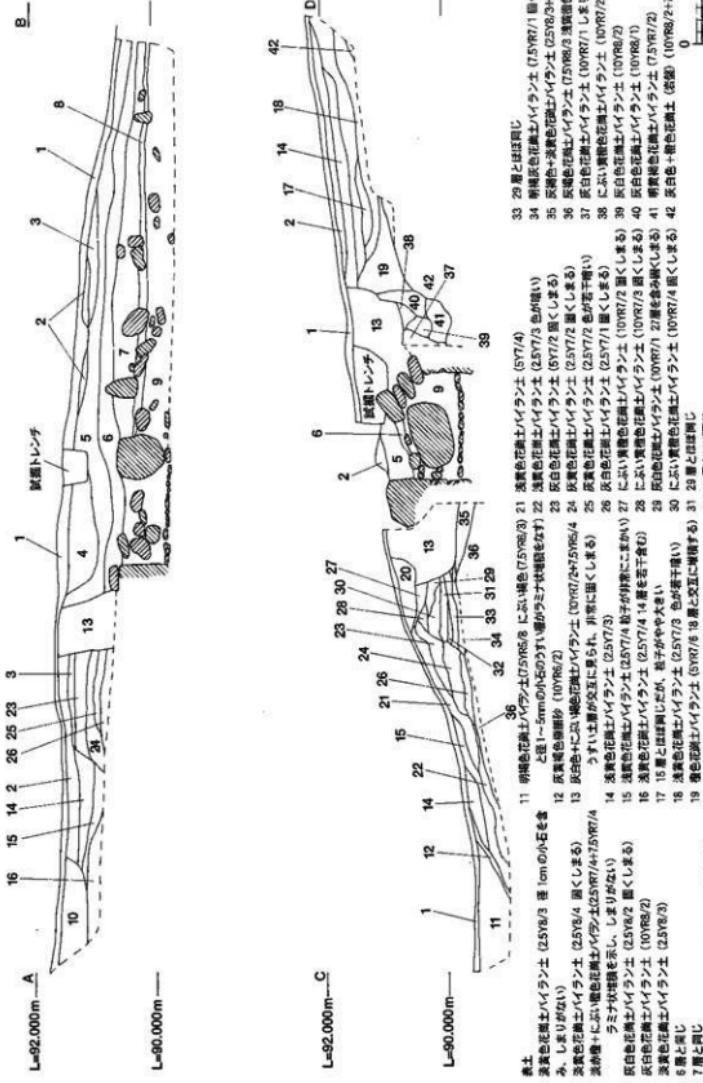
石室内から須恵器・土師器の土器類、馬具・刀子・鉄釘などの鉄製品、耳環・小玉・管玉・切子玉の装飾類が出土している。

1 ~ 23 は須恵器、24 ~ 27 は土師器である。

1 は杯蓋であり、奥壁付近の敷石直上と羨道部より出土する。天井部は平坦気味で、体部と口



第5図 玄室・羨道部 平・立面図 (S:1/40)



第6図 土層断面図 (S1/80)

縁部の境に僅かな稜を有し、口縁部は直立する。天井部外面は静止ヘラ削りの後にナデが施される。

2は杯蓋であり、玄門付近より出土する。体部と口縁部の境が僅かに屈曲して、口縁部は直立し口唇部がやや外反する。天井部外面は回転ヘラ切り後に静止ヘラ削りが施される。外面のほぼ半分に自然釉がかかる。

3は杯蓋であり、奥壁付近の敷石床直上より出土する。体部と口縁部の境に僅かな稜を有し、口縁部はほぼ直立する。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は1方向からのナデが施される。

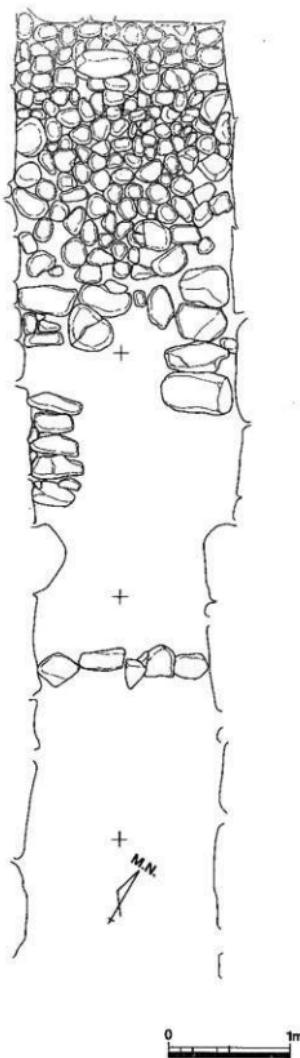
4は杯蓋であり、玄門付近と奥壁付近の敷石直上より出土する。体部と口縁部の境に僅かな稜を有し、口縁部は直立する。天井部外面はナデ・ヘラ削り、内面はナデ、体部内面は板ナデが施される。

5は杯蓋であり、奥壁付近の敷石直上より出土する。体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は直立する。天井部外面の中心部には静止ヘラ削りが残存し、口縁部は布ナデが施される。内面にロクロ痕が明瞭に見られる。

6は杯蓋であり、奥壁付近の敷石直上より出土する。体部と口縁部の境に僅かな稜を有し、口縁部はほぼ直立する。内外面とも回転ナデが施される。

7は杯身であり、奥壁付近と玄室中央の床直上より出土する。体部は低く、途中で一度折れて上外方に延びて受け部となる。立ち上がりは内傾し短い。底部外面は静止ヘラ切りの後に回転ヘラ削りが施される。

8は杯身であり、奥壁付近の敷石直上より出土する。体部は緩やかな傾斜で直線的に延びる。立ち上がりは内傾し短い。底部外面は静止ヘラ切りの後にナデが施される。



第7図 敷石検出状況図 (S:1/40)

9は高杯であり、奥壁寄りの埋土より出土する。内面に自然釉がかかる。

10は高杯の脚部であり、奥壁寄りの敷石面上より出土する。外面に2本と1本の沈線を有する。

11はほぼ完形の高杯であり、狭道部より小片の状態で出土する。全体の器形は左右非対称であり、杯部は口縁部と底部の境に沈線を巡らすことで明確にする。杯部から延びる脚部は外反しながら下外方に開いた後、真横に広がり、裾部は屈曲する。脚部中央に沈線を有する。

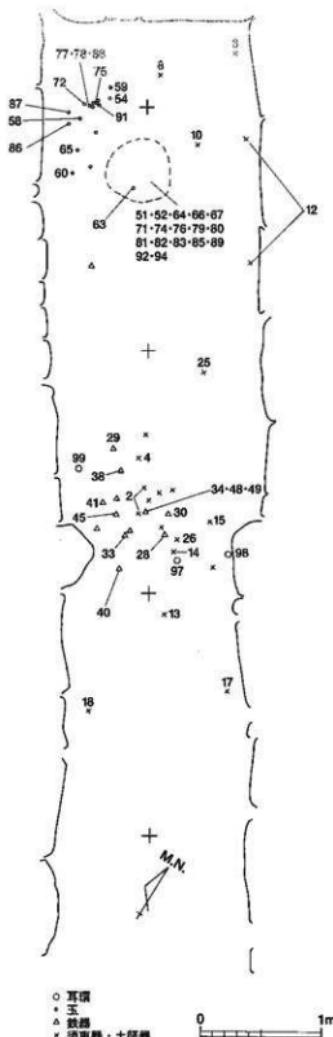
12は口縁部を欠損するハソウであり、玄室東側側壁近くの敷石の下より出土する。体部下半から底部に回転ヘラ削りが施され、底部に回転ヘラ切りが部分的に残存する。

13はほぼ完形の脚付短頸壺であり、玄門付近の床面より小片の状態で出土する。脚部は焼成前とみられる変形が認められ左右非対称である。脚部と口縁部に沈線を有し、胴部には浅い沈線に挟まれた刺突文が施される。胴部下半はカキ目様の回転ナデ、下端は回転ヘラ削りが施される。内外面には自然釉がかかる。

14は完形の脚付長頸壺であり、玄門部の床面直上より出土する。器形は全体として若干傾いている。脚裾部はほぼ真横に広がり、胴部は中央のやや張る算盤珠形を呈す。口縁部に2本、胴部に1本の沈線を有する。胴部下半は回転ヘラ削りの後にナデが施される。

15は短頸壺であり、玄門付近の床面直上と狭道部より出土する。器高が低く、胴部は偏平な球形をなし、口縁端部は角張る。胴部に浅い沈線が巡る。底部外面は回転ヘラ削りが施される。

16は短頸壺であり、玄室奥壁付近の敷石直上より小片の状態で出土する。丸底から球形に立ち上がる胴部は肩が張り、やや外開きの頸部を有する。口縁端部は丸みを帯びている。底部中央は静止ヘラ削り、底部周縁と胴



第8図 遺物出土位置図 (S:1/40)

部下位は回転ヘラ削りが施される。口縁部内外面・肩部外面と胴部内面下半に自然釉がかかり、胴部外面下半の一部に釉がたれている。

17は平瓶であり、羨道部の東側側壁寄りの敷石直上と玄門付近の床面直上より小片の状態で出土する。底部に平底を持ち、胴部は中央が強く張る優平面な球形を呈する。肩部の中心から外れた位置に真上に延びる頸部は直線的に口縁端部に至る。口縁端部は丸い。底部外面は切り離しの後に回転のナデが施され、胴部下半は回転ヘラ削り、上半はカキ目が施されている。肩部内面には接合痕が1ヶ所明瞭に見られる。

18は完形の平瓶であり、羨道部の西側側壁寄りの床面直上より出土する。底部は丸底であり、胴部は若干偏平な球形を呈する。肩部の中心から外れた位置に斜めに延びる頸部は直線的に口縁端部に至る。口縁端部は角張る。胴部上面にある2個の円形浮文は丸く、丁寧に貼り付けられている。頸部外面には2本の沈線を有する。底部と胴部下端は回転ヘラ削りが施され、頸部と口縁部の内外面には布ナデが見られる。

19は口径29cmを測る大甕であり、玄室の奥壁付近と羨道部より小片の状態で出土する。口縁部は頸部からほぼ直線的に上外方に延びる。口縁端部は平坦である。外面には2本の沈線の上下に波形の違う波状文が2条巡っており、波状文の単位は1条10本である。口縁端部は布ナデによる調節が施される。口縁部外面の一部に自然釉がかかっている。

20は大甕の口縁部破片であり、玄室の玄門付近の床面直上より出土する。外面には波状文が施される。

21は大甕の頸部から胴部上位にかけての破片であり、玄室の奥壁側の床面直上と羨道部より出土する。頸部と胴部の境付近に非常に浅い沈線を巡らし、胴部外面の調整は平行タタキ目の後にカキ目が施される。内面は青海波状タタキ目が施される。

22は杯蓋であり、玄室の玄門側と羨道部より出土する。天井部は水平に近く、口縁端部は下方へ短く屈曲する。天井部中央には偏平な擬宝珠様つまみを有する。天井部外面はつまみも含めてナデが施され、内面は1方向からのナデが施される。

23は皿であり、羨道部の埋土より出土する。平底から銳角に立ち上がる体部は直線的に口縁部に至る。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデが施される。内外面に幾筋もの火拂が見られる。

24は杯であり、玄室の玄門付近の埋土より出土する。体部は平底から僅かに内湾しながら立ち上がる。底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。

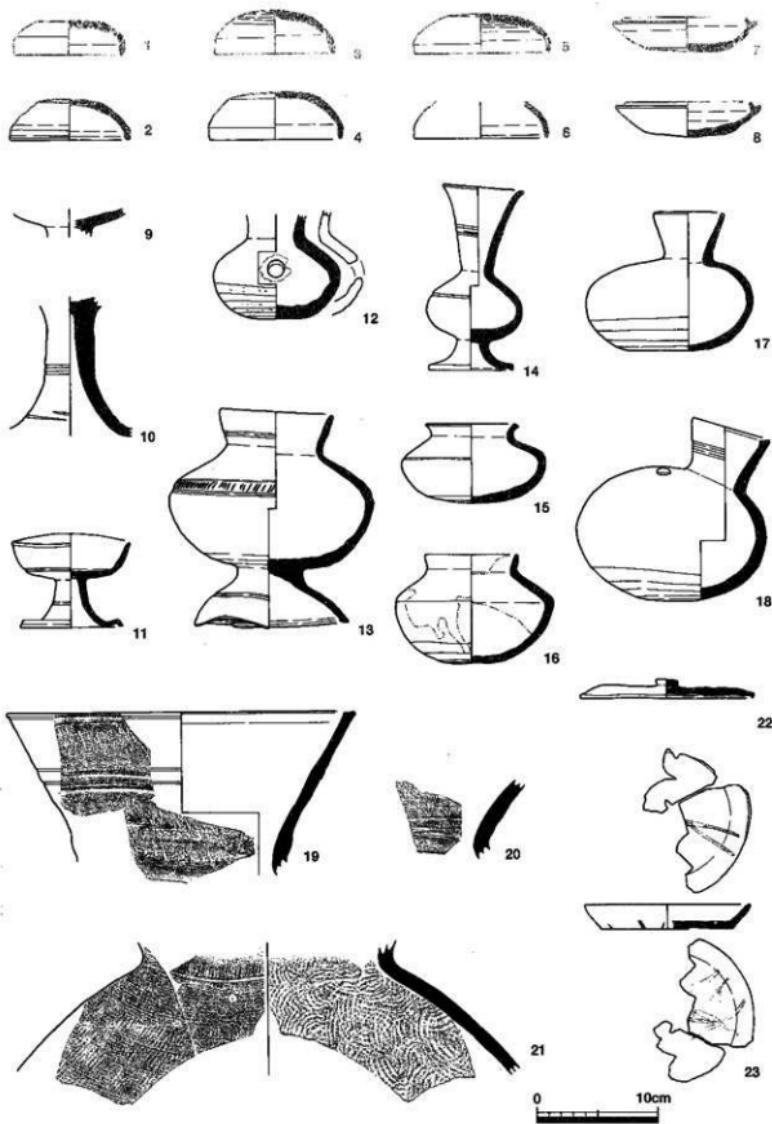
25は杯であり、玄室中央の玄門寄りの位置で床石直上より出土する。平底から立ち上がる体部は中央で上外方に若干屈曲する。器厚は全体的に厚い。内面は回転ナデが施されるが、外面は摩滅・剥離が著しい。

26は杯であり、玄門の床面より出土する。器形は半球形を呈し、口縁部内面に非常に僅かな段を有する。外面は摩滅のため調整不明であるが、内面はナデが施される。体部内面には放射状暗文が施される。

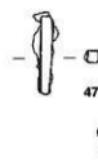
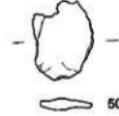
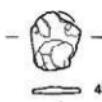
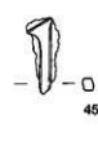
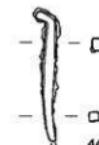
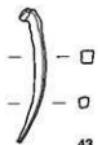
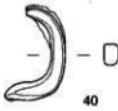
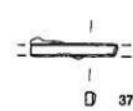
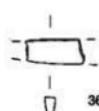
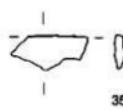
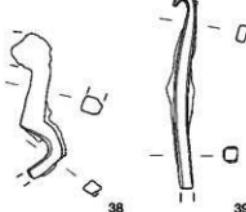
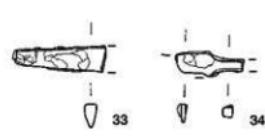
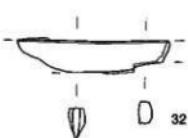
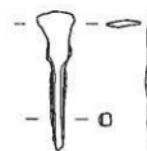
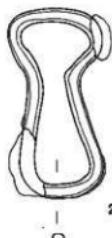
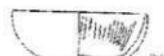
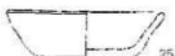
27は玄室中央の床面より出土する。底径は40cmを測り、透かしを有する。外面は縱方向の刷毛目、内面はナデが施される。

28~50は鉄製品であり、全て玄門付近より出土する。

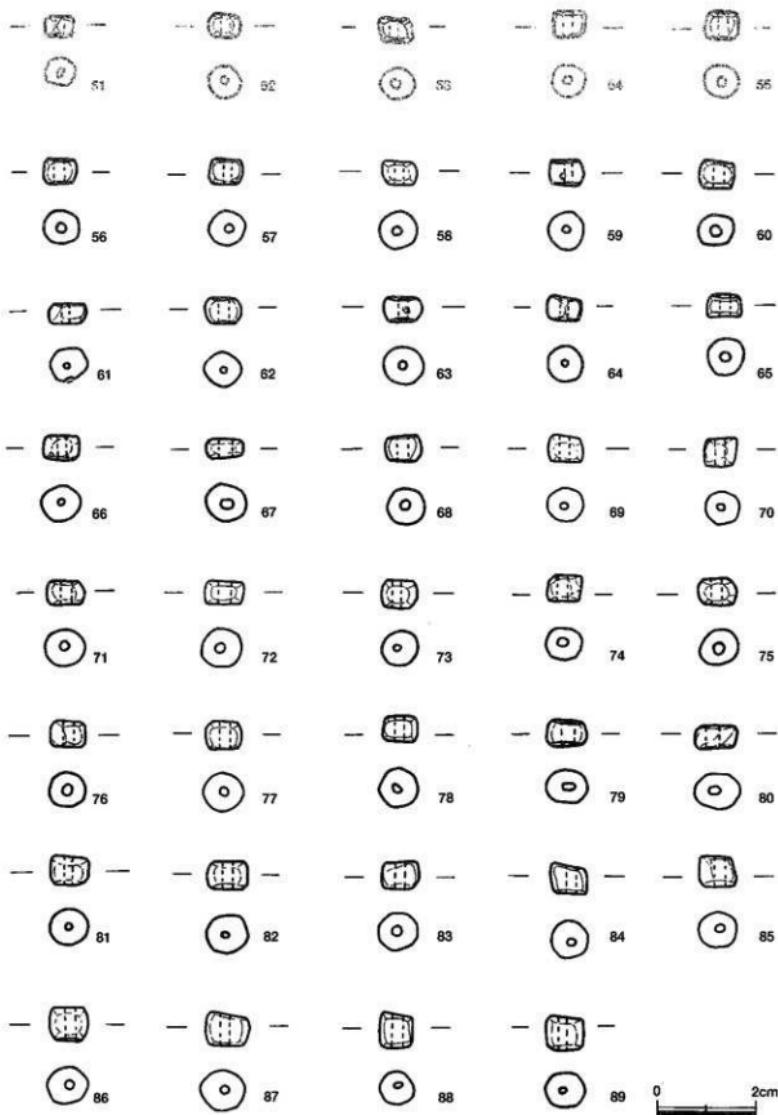
28・29・38・39は馬具の鉄具である。28は縁金で、刺金を欠損する。形態は中央でくびれる。29は刺金の先端を欠損する。縁金の形態は、先端部が丸く中央で大きく屈曲し輪金に至る馬蹄形を呈する。38・39は縁金または刺金であり、端部が大きく曲がる。



第9図 出土遺物実測図(1) (S:1/4)



第10図 出土遺物実測図(2) (S:1/2・1/4)



第 11 図 出土遺物実測図 (3) (S:1/1)

30・31は鉄鎌、32～37は刀子である。32・34は切先と茎基部を欠損し、闇を有する。33・35・36は刃部片、37は茎片である。

42～48は断面方形の釘である。40は断面方形で、端部は細くなり、釘の可能性がある。  
41は円形装飾具、49・50は用途不明の鉄板片である。

51～91はガラス製の小玉であり、玄室の奥壁寄りの床面直上より出土する。圓化できたのは完形の41点であるが、割れた玉の破片も出土する。最小の玉は51で、直径6mm、高さ4mm、重量0.1g、最大は91で、直径11mm、高さ9mm、重量1.6gを測る。この2点以外の玉の大きさは、直径7～8mm、高さ4～7mm、重量0.3～0.8gを測る。色調は紺色であるが、玉ごとに僅かな濃淡の違いがある。破片には緑色もある。

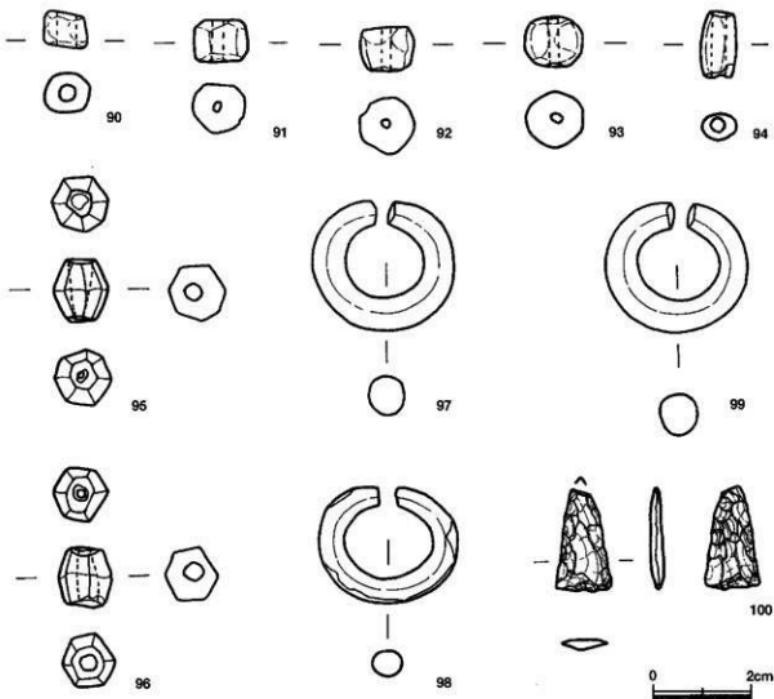
92・93は赤琥珀製で、92は白玉、93は丸玉である。色調は半透明の淡赤橙色である。

94は碧玉製の管玉で、断面は梢円形を呈する。

95・96は水晶製の切子玉で、95は14面体、96は12面体に整形される。

97～99は耳環で、銅芯に銀鍍金を施している。98はやや小形である。

100はサスカイト製の平基式石鎌である。



第12図 出土遺物実測図(4)(S:1/1)

## 第4章　まとめ

龍藏山古墳群3号墳は、ほぼ南東に開口する両袖の横穴式石室を埋葬主体とする円墳である。墳丘は流出や削平を受け、石室の崩落もあるが、床面の遺存状態は極めて良好で、多数の遺物が出土した。以下、発掘調査により明らかになった点を整理する。

### 第1節 古墳の年代

石室内出土の遺物は、玄室の奥壁側と玄門付近と羨道の3ヶ所に集中している。出土遺物は、須恵器・土師器・耳環・ガラス製の小玉や水晶の切子玉などの装飾品・馬具や刀子等の鉄製品である。これらの遺物の中で体系的な編年と実年代が確立している須恵器を基に古墳の年代について考えてみたい。

杯蓋は形態的特徴から4～6と1～3と22の3種類に分けられる。4～6は口径10.8～11.0cmであり、天井部が低く平らに近くなる。1～3は口径8.8～10.0cmで小形化しており、天井部と口縁部の境が不明瞭である。22は口径14.2cmで、天井部は水平に近く、口縁端部は下方へ短く屈曲する。杯身は口径10cmで、器高が低く偏平であり、立ち上がりは短く内傾し雄部は丸い。

高杯は長脚高杯（10）と無蓋短脚高杯（11）がある。10は沈線を巡らし、透かしがない。11の脚部は外反しながら下外方に開いた後、真横に広がり、裾部は屈曲する。

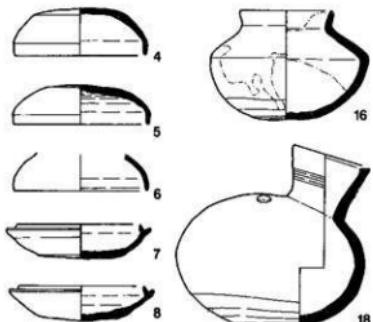
平瓶は2点出土する。18は体部が丸く、口縁端部は角張る。把手はボタン状のものを貼付している。17はやや偏平な体部で、口縁端部は丸い。ボタン状の装飾はない。

壺は脚付長頸壺（14）・脚付短頸壺（13）・短頸壺（15・16）がある。13・16は体部の肩にやや張りを認めるが、底部は丸い。13の体部に刺突文が施される。15は偏平な体部で、14の脚部は高杯11とほぼ同様な形態である。

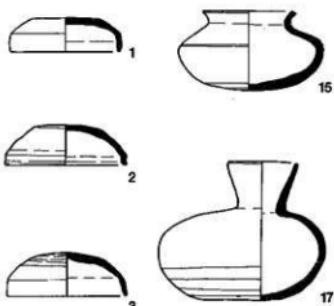
皿（23）は口径に対して器高が極めて低い器形である。

土師器杯（26）は半球形を呈し、口縁部内面に僅かな段を有する。内面には放射状暗文が施さ

II型式第5～6段階



II型式第6段階



第13図 須恵器変遷図

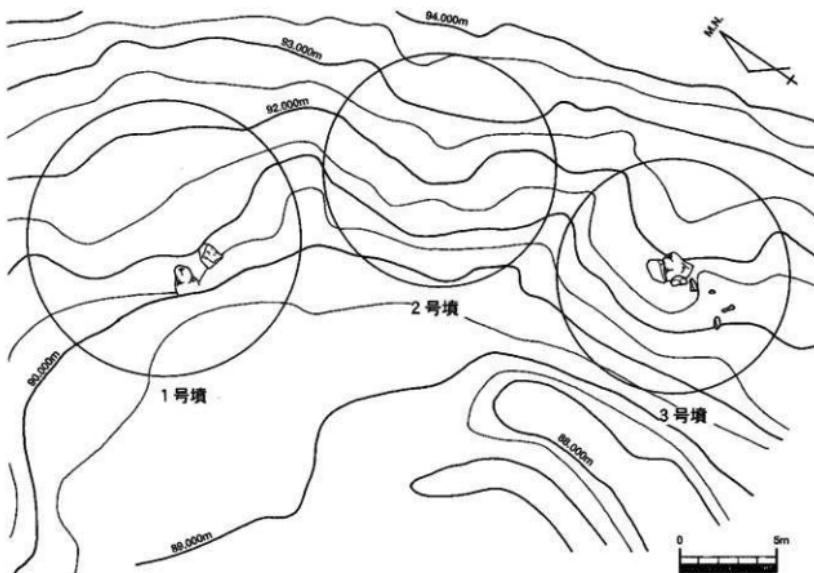
れる。24・25は平底から急傾斜に立ち上がり、口縁端部は丸くなる。

これらの特徴を中村編年<sup>1)</sup>に当ててみれば、4～8・13・16・18はⅡ型式第5～6段階、1～3・10・11・14・15・17はⅢ型式第6段階、22・23はⅣ型式第4段階に相当する。今回出土した須恵器の実年代は、7世紀前半と9世紀初頭の二つの時期である。さらに7世紀前半の須恵器は比較的古い様相のものと新しい様相のものに分けられる(第13図)。24・25の土師器杯は13世紀中頃の土器と考えられる。以上のことから、本古墳は7世紀前半に築造され、時間としてあまり経っていない中頃に近い時期に追葬され、その後の9世紀初頭から13世紀中頃までは開口していたものと想定される。

## 第2節 古墳の規模と構造

本古墳は墳丘・石室の残存状況はよいとは言えず、特に墳丘に関しては明確な周溝が確認されていないため、あくまでも地形測量に基づく推定復元図である。第14図で示すように、墳丘の規模は古墳の東と西側にあるコンターラインの変換点を基準にすると直径約15.00mと推定され、下方の平坦面からの高さ約2.00mを測る。玄室は全長4.10m、幅は奥壁側と玄門側で1.70m、中央で1.80mを測り、現存する側壁の高さは1.30mである。羨道部は全長3.10m、玄門側の幅1.40m、羨門側の幅約1.60mを測る。

香川町にある後期古墳としては、横岡山古墳、東赤坂古墳<sup>2)</sup>、八王子古墳<sup>3)</sup>、万塚古墳<sup>4)</sup>が著名であるが、その他にも30基以上の古墳が群集していた油山古墳群<sup>5)</sup>、2基以上の古墳があつた清谷古墳群<sup>6)</sup>、剣山古墳<sup>7)</sup>が所在している。しかし、後者の3古墳は土木工事や田畠の開墾な



第14図 龍満山古墳群地形測量図 (S:1/250)

どにより消滅しており、その詳細は不明である。現存または発掘調査の行われた前者の4基の古墳と比較することで本古墳の石室の特徴についてまとめてみたい。

4基の古墳は木古墳同様に後世の流失や削平により墳丘の遺存状態は悪く、報告書にも記載されていない。本古墳と隣接する龍満山古墳群2号墳・3号墳は地形測量に基づく推定復元値で直径12mと推定され、本古墳より若干小形の古墳である。龍満山古墳群は後期の群集墳として一般的な規模の古墳であると言える。

石室の規模を比較してみる。玄室の長さが最も長いのは4.10mを測る本古墳であり、最短は万塚古墳の2.28mである。他の古墳玄室の長さは、東赤坂古墳が3.70m、八王子古墳が3.20m、横岡山古墳が2.95mを測り、各古墳ごとに長さに差がある。しかし、幅については、2.03mを測る東赤坂古墳を除けば、他の古墳は1.70mである。その結果として玄室の長さをその幅で割った玄室比率に大きな差が出ている。玄室比率は3グループに分けられる。万塚古墳は1.3、横岡山古墳・東赤坂古墳・八王子古墳は1.7～1.8であり、本古墳の玄室比率が飛び抜けて高く、2.4である。

石室の平面プランを概観すると、全ての古墳は國木分類<sup>8)</sup>のB-2類の範疇に入るが、万塚古墳・横岡山古墳のように羨道部が玄室よりはるかに長い古墳と本古墳のように玄室の方が長い古墳の2種類がある。玄門の形態は、本古墳を除く4基の古墳は片袖式であり、玄門部の内側への突出はみられない。本古墳のみが両袖式で、内側への突出は西側側壁のみにみられる。畿内色の強い後期古墳が密集する香川町の中にありながら、本古墳は九州型横穴式石室の特徴を持っており、香川町では特異な特徴と言える。しかし、出土土器に暗文土師器(26)が含まれており、畿内の要素も併せ持っている。

次に石室の構築について見てみよう。万塚古墳と八王子古墳の石室については、天井石と側壁の大部分が崩落しており基底石と床面のみ検出され、横岡山古墳と東赤坂古墳はほぼ完全な状態で遺存するが、床面の状況は不明である。石室に使用された石材は、万塚古墳と八王子古墳の基底石は花崗岩が並べられており、調査時には石室内に花崗岩の巨石と川原石が崩落していた。横岡山古墳と町内最大規模の東赤坂古墳は花崗岩の巨石と少量の川原石を積み上げている。本古墳は花崗岩と川原石を使用している。すなわち、町内の古墳は花崗岩の巨石と川原石を石室に使用するという特徴を持っている。

石材の積み方は本古墳と横岡山古墳・東赤坂古墳を比較すると全く違っている。横岡山古墳・東赤坂古墳は花崗岩の巨石を基底石から天井石まで積み上げており、その間に少量の川原石を詰めている。一方、本古墳は花崗岩と川原石を使用するが、独特な積み方をしている。その詳細は第3章に記述しているが、簡略にまとめると次のとおりである。東側側壁は基底石に花崗岩の大きな石を横長に並べ、その上に偏平な川原石を小口積みと横長積みにより整然と積み上げている。西側側壁は、花崗岩の大きな石と偏平な川原石を基底石に使い、その上に偏平な川原石を1段ないし2段に積み、さらにその上は加工された花崗岩の巨石と偏平な川原石を積み上げている。このような非対称的な積み方と花崗岩の巨石を上部に積む古墳は県内では例を見ず、本古墳の大きな特徴の一つである。

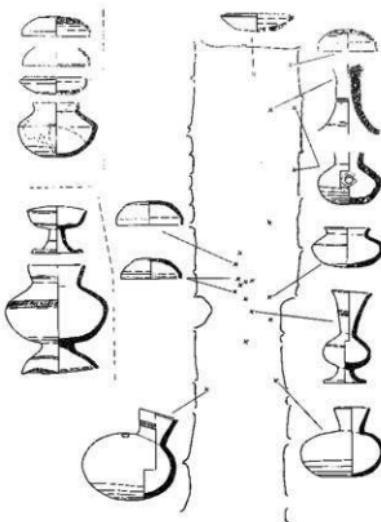
次に敷石について見てみよう。万塚古墳と八王子古墳は玄室に川原石を敷いており、本古墳は長い玄室の中央から奥壁にかけて礫を敷き詰めているが、玄門側では方柱状の川原石を部分的に並べている。本古墳の玄室床面は異なる構造をなし、石室としては単室であるが、その中で後室・前室的な空間を意識したと考えることもできる。

### 第3章 石室内埋葬順序

本古墳では石室の床面直上及び床面近くから遺物が出土している。これら副葬品の出土位置・時期を詳細に検討することにより、被葬者の埋葬順序が推定できる。

土器は玄室北東部と玄門付近と羨道部の3ヶ所から出土しており、時期の明確な須恵器の分布状況を示したのが第15図である。分布状況と時期を合わせると、Ⅱ型式5~6段階の土器は奥壁側の出土が多く、Ⅱ型式6段階の土器は玄門付近からの出土が多い傾向を示している。さらに、装飾品である耳環・玉類と馬具・刀子・釘などの鉄製品の分布を見ると、玄室北西部に多数のガラス製小玉・碧玉製管玉が出土し、玄門付近では耳環3点と鉄製品が出土している。

以上のことと総合的に考えると、築造時期である7世紀前半の被葬者は、西側側壁沿いの奥壁寄りの位置に埋葬され、追葬された被葬者は玄門付近に埋葬されたと考えられる。



第15図 須恵器出土分布図

### 第4節 古墳の特徴について

今回の調査で判明した事や特徴を挙げると以下のとおりである。

- ①直径15mを測る円墳であり、3基の古墳からなる群集墳の一つである。
- ②ほぼ南東に開口する両袖の横穴式石室を持つ。
- ③築造時期は7世紀前半であり、7世紀前半でも中頃に近い時期に追葬された。
- ④九州型横穴式石室の特徴が見られ、香川町内の後期古墳としては石室の形態や規模において特異な存在である。
- ⑤非対称的な積み方と花崗岩の巨石を上部に積む古墳は県内では例を見ない。

#### 註

- 1) 中村 浩『陶邑III』(財)大阪文化財センター 1980年  
『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981年
- 2) 香川町誌編集委員会『香川町誌』香川町 1993年
- 3) 井上勝之 中原耕男『香川町浅野八王子古墳調査報告』『文化財協会報』第58号 香川県文化財保護協会 1973年
- 4) 中原耕男『万塚古墳発掘調査報告』『文化財協会報』特別号10 香川県文化財保護協会 1971年
- 5) 2) 同じ
- 6) 國木健司『清谷1号墳出土の遺物』『香川考古』第5号 香川考古刊行会 1996年
- 7) 香川町史編集委員会 旧『香川町史』香川町 1970年
- 8) 國木健司『香川の横穴式石室』『四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部 1995年

## 旗瀬山古墳群1号墳出土物調査表

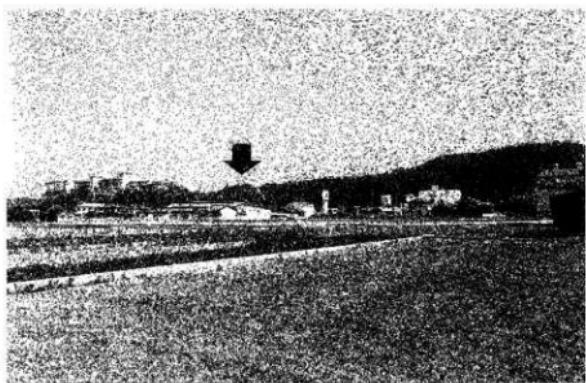
測量の印記を記入せよ。

出土品番号	部 部	出 収集地	年 月日	性 別	色 国	質 土	書 令	測量の印記を記入せよ。	
								外観	底面
1 須恵器 谷型	3.5 外観	5.5 底面	(3.0) 裏面	外観: 縞模様ナメ 天井部: 扇形ハニカムナメ 内面: 布ナメ	外観: 茶白7.5Y7/1 内面: 淡青7.5Y7/1	密			
2 須恵器 杯盤	9.8 外観		(3.4) 裏面	外観: 回転ナメ 天井部: 斜面ヘラ削り 静止ヘラ削り 内面: 布ナメ	外観: 茶白2.5Y7/1 内面: 茶白2.5Y7/1	精良			
3 須恵器 壺	10 外観		(3.6) 裏面	外観: 口縁部: 回転ナメ 天井部: 扇形ヘラ削り 内面: 布ナメ	外観: 茶白6/ 内面: 茶白6/	密			
4 須恵器 壺	10.8 外観		(3.8) 裏面	外観: 口縁部: 回転ナメ 天井部: 布ナメ 内面: 布ナメ	外観: 茶白6/ 内面: 茶白6/	密			
5 須恵器 壺蓋	11 外観		(3.2) 裏面	外観: 口縁部: 布ナメ 天井部: 布ナメ 静止ヘラ削り 内面: 口縁部: 布ナメ	外観: 茶白6/ 内面: 茶白6/	密			
6 須恵器 壺蓋	10.9 外観		(2.9) 裏面	外観: 口縁部: 回転ナメ 底部: 静止ヘラ削り 内面: 口縁部: 回転ナメ	外観: 茶白6/ 内面: 茶白6/	密			
7 須恵器 壺身	10.2 外観	7.2 裏面	(2.8) 裏面	外観: 口縁部: 回転ナメ 底部: 静止ヘラ削り 内面: 口縁部: 回転ナメ	外観: 茶白5/ 内面: 茶白5/	精良			
8 須恵器 壺身	10.4 外観	8.1 裏面	(2.9) 裏面	外観: 口縁部: 回転ナメ 底部: 静止ヘラ削り 内面: 口縁部: 回転ナメ	外観: 茶白6/ 内面: 茶白5/	密			
9 須恵器 高杯			(2.4) 裏面	外観: 口縁部: 回転ナメ 内面: 回転ナメ	外観: 茶白5V6/1 内面: 反土7.5Y4/2	精良			
10 須恵器 高杯			(11.5) 裏面	外観: 口縁部: 回転ナメ 内面: 回転ナメ	外観: 茶7.5Y6/1 内面: 反7.5Y6/1	密	鶴紋部: 沈綾2枚 鶴頭部: 朱色の沈綾1枚		
11 須恵器 高杯	9.8 外観	8.2 裏面	(7.0) 裏面	外観: 口縁部: 回転ナメ 内面: 回転ナメ	外観: 茶8.0N4/0 内面: 反8.0N4/0	やや密	鶴部: 沈綾1枚		
12 須恵器 はそう			(8.6) 裏面	外観: 口縁部: 回転ナメ 体部上半: 回転ナメ 体部下半: 回転ヘラ削り 内面: 口縁部: 回転ナメ	外観: 茶白6/ 内面: 青灰10BG6/1	精良			
13 須恵器 脚付短頸壺	9.3 外観	12.7 (16.0)		外観: 口縁部: 布ナメ 底部: 口縁部: 回転ナメ 内面: 口縁部: 回転ナメ	外観: 茶灰2.5Y7/2 内面: 茶5Y4/1	密	口縁部: 沈綾1枚 脚部: 沈綾1枚 体部: 寶目文、沈綾2枚		
14 須恵器 脚付長頸壺	6.5 外観	7 (15.4)		外観: 口縁部: 布ナメ 底部: 口縁部: 回転ナメ 内面: 口縁部: 回転ナメ	外観: 青灰5BG6/1 内面: 青灰5BG6/1	密	頭部: 沈綾2枚 体部上半: 沈綾1枚		
15 須恵器 短頸壺	7.8 外観	5 (5.5)		外観: 口縁部: 布ナメ 底部: 口縁部: 回転ナメ 内面: 回転ナメ	外観: 茶白6/ 内面: 茶白6/	密	脚部: 沈綾1枚		
16 須恵器 短頸壺	7.6 外観	4 (9.0)		外観: 口縁部: 回転ナメ 底部: 回転ナメ 内面: 回転ナメ	外観: 茶7.5Y4/1 内面: 茶7.5Y4/1	密			
17 須恵器 平底	5.6 外観	-6.8 (11.4)		外観: 口縁部: 布ナメ 底部: カ牛目 内面: 口縁部: 回転ナメ 内面: 口縁部: 回転ナメ	外観: 雜青灰10G4/1 内面: 明青灰5BG7/1	密			
18 須恵器 平板	6.6 外観		(13.3)	外観: 口縁部: 布ナメ 底部下半: 回転ヘラ削り 内面: 回転ナメ	外観: 茶7.0/0 内面: 茶M2/0	密	外腹頭部: 沈綾2枚		
19 須恵器 平板	29 外観		(12.5)	外観: 口縁部: 回転ナメ 底部: 口縁部: 回転ナメ 内面: 回転ナメ	外観: 茶白7.5Y7/1 内面: 茶白7Y7/1	密	口縁部外腹: 浅黄灰6条2段 (横状)		
20 須恵器 板			(6.8)	外観: 口縁部: 回転ナメ 底部: 口縁部: 回転ナメ 内面: 口縁部: 回転ナメ	外観: 8GN8/ 内面: 茶白N7/	密			
21 須恵器 板			(10.5)	外観: 口縁部: カ牛目、タガキ 内面: 口縁部: 開心円文三足鼎 内面: 口縁部: 開心円文三足鼎	外観: 茶白7Y7/1 内面: 茶白7Y7/1	密			
22 須恵器 杯盤	14.2 外観		(1.7)	外観: 天井部: 扇形ヘラ削り 内面: 口縁部: 回転ナメ 内面: 口縁部: 回転ナメ 内面: 天井部: 方陣からナメ	外観: 茶NS/ 内面: オリーブ反5GY5/1	精良			
23 須恵器 皿	13.7 外観	10.8 (2.0)		外観: 口縁部: 回転ナメ 内面: 口縁部: 回転ナメ	外観: 茶5V6/1 内面: 反5Y6/1	密			
24 土器器 杯	10.2 外観	8.5 (3.0)		外観: 口縁部: 布ナメ 内面: 口縁部: 布ナメ	外観: 浅黄緑7.5YR8/4 内面: 浅黄緑10YR8/4	精良			
25 土器器 杯	12.7 外観	7.8 (4.1)		外観: 底底のため不規 内面: 口縁部: 回転ナメ	外観: 浅黄緑10YR8/3 内面: 浅黄緑10YR8/4	精良			
26 土器器 杯	11 外観	4.4 (4.4)		外観: 底底のため不規 内面: ナメ	外観: 浅黄緑7.5YR8/3 内面: 淡黄緑10YR8/4	精良			
27 土器器		40 (8.2)		外観: ナメ	外観: 浅黄緑10YR8/4 内面: 淡黄緑10YR8/4	精良			

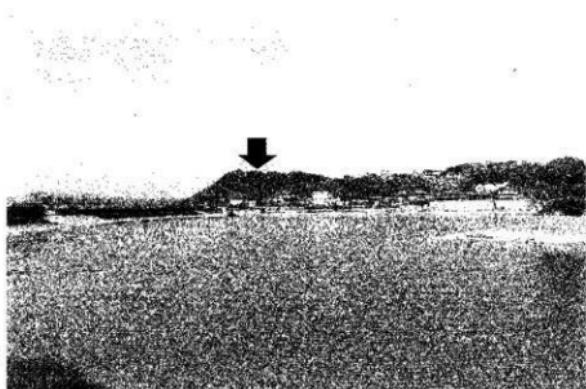
遺物番号	器種	寸法(mm)			材質	調査
		高さ	幅	厚さ		
28	鉤	7.0	3.8	0.5		
29	鉤	6.0	4.2	0.6		
30	鉤	5.1	3.4	0.5		
31	鉤	3.8	0.8	0.5		
32	刀子	6.3	1.3	0.3	柄:幅0.9cm, 厚0.6cm	
33	刀子	3.7	1.1	0.5		
34	刀子	2.9	1.0	0.2	柄:幅0.4cm, 厚0.4cm	
35	刀子	3.2	1.5	0.3		
36	刀子	2.4	1.0	0.5		
37	刀子	3.6	0.5	0.3		
38	鉗具	6.0		0.7		
39	鉗具	8.0	0.6	0.6		
40	不明	3.9	6.0	0.9		
41	不明	2.7		0.2		
42	釘	7.0		0.6		
43	釘	5.5		0.5		
44	釘	5.3		0.5		
45	釘	3.1		0.5		
46	釘	3.2		0.4		
47	釘	3.2		0.5		
48	釘	2.6		0.4		
49	不明	2.4	2.0	0.3		
50	不明	2.3	3.2	0.5		

遺物番号	器種	寸法(mm)			材質	調査
		直徑	高さ	孔径		
51	小玉	6.0	4.0	2.0	ガラス	やや透明感のある濃い青色
52	小玉	7.0	5.0	1.5	0.3	ガラス やや透明感のある青色
53	小玉	7.0	6.0	2.0	0.4	ガラス やや透明感のある濃い青色
54	小玉	7.0	5.0	2.0	0.4	ガラス やや透明感のある青色
55	小玉	7.0	6.0	2.0	0.4	ガラス やや透明感のある濃い青色
56	小玉	7.0	5.0	2.0	0.4	ガラス やや透明感のある濃い青色
57	小玉	7.0	5.0	1.8	0.4	ガラス やや透明感のある濃い青色
58	小玉	8.0	4.5	1.8	0.3	ガラス やや透明感のある濃い青色
59	小玉	7.0×8.0	5.0	1.8	0.5	ガラス やや透明感のある濃い青色
60	小玉	8.0×7.0	6.0	2.0	0.4	ガラス やや透明感のある濃い青色
61	小玉	4.0	4.0	1.5	0.4	ガラス やや透明感のある濃い青色
62	小玉	7.0×8.0	5.0	1.6	0.4	ガラス 濃い青色
63	小玉	10.0	5.0	1.5	0.5	ガラス やや透明感のある青色
64	小玉	7.0	5.0	1.4	0.4	ガラス やや透明感のある青色
65	小玉	8.0	4.0	2.0	0.4	ガラス やや透明感のある濃い青色
66	小玉	7.0×8.0	6.5	1.5	0.5	ガラス やや透明感のある青色
67	小玉	7.0×8.0	4.0	2.5	0.3	ガラス やや透明感のある青色
68	小玉	8.0	5.5	2.0	0.5	ガラス 濃い青色(真青色)
69	小玉	7.0	6.0	1.5	0.5	ガラス やや透明感のある青色
70	小玉	7.0	6.0	1.9	0.5	ガラス やや透明感のある濃い青色
71	小玉	8.0	5.0	2.1	0.5	ガラス やや透明感のある青色
72	小玉	8.0	5.0	2.2	0.5	ガラス やや透明感のある濃い青色
73	小玉	7.0×8.0	8.0	1.4	0.5	ガラス やや透明感のある青色
74	小玉	7.0×8.0	5.0	2.2	0.4	ガラス やや透明感のある青色
75	小玉	8.0	5.5	2.3	0.7	ガラス やや透明感のある青色
76	小玉	7.0×8.0	5.0	2.0	0.5	ガラス やや透明感のある青色
77	小玉	8.0	6.0	2.0	0.8	ガラス やや透明感のある濃い青色
78	小玉	8.0	5.0	1.9	0.6	ガラス 濃い青色
79	小玉	7.0×8.0	5.0	2.6	0.5	ガラス やや透明感のある青色
80	小玉	7.0×9.0	4.5	2.8	0.5	ガラス やや透明感のある青色
81	小玉	7.0×8.0	6.0	1.5	0.6	ガラス やや透明感のある青色
82	小玉	8.0	6.0	1.8	0.6	ガラス やや透明感のある青色
83	小玉	7.5×8.0	6.0	2.0	0.6	ガラス やや透明感のある青色
84	小玉	8.0	6.0	2.0	0.6	ガラス 濃い青色(真青色), 裂隙状の剥離白
85	小玉	7.0×8.0	6.5	1.9	0.6	ガラス 濃い青色
86	小玉	9.0	7.0	1.9	0.7	ガラス やや透明感のある青色
87	小玉	8.0	7.0	1.8	0.8	ガラス やや透明感のある濃い青色
88	小玉	7.0	7.0	2.0	0.8	ガラス やや透明感のある青色
89	小玉	7.0×8.0	7.0	1.8	0.8	ガラス やや透明感のある濃い青色
90	小玉	8.0×9.0	7.5	3.2	0.8	ガラス やや透明感のある濃い青色
91	小玉	10.0×11.0	8.0	2.0	1.6	ガラス 濃い青色
92	臼玉	11.0	9.0	1.8	1.7	赤鉛鉢 塗2SYTR6/B~明赤塗5/8
93	丸玉	11.0	10.0	2.4	2.1	赤鉛鉢 塗2SYTR6/B~墨7/6
94	骨玉	14.0	6.0×7.0	3.0	0.3	骨玉 墓色N/2
95	切子玉	13.0	12.0	1.0~5.4	2.2	水晶 黒色透明
96	切子玉	12.0	11.0	2.5~4.0	1.8	水晶 黑色透明
97	眞珠	28×27	0.6×0.7	18.2	1.6	貝殻 真珠メキ
98	眞珠	28×25	0.6	7.9	1.6	貝殻 真珠メキ
99	眞珠	29×27	0.9×0.7	16.3	1.6	貝殻 真珠メキ
100	石鏡	(長さ)21 (幅)12		(厚さ)2.5	0.6	サクカイト

# 図 版



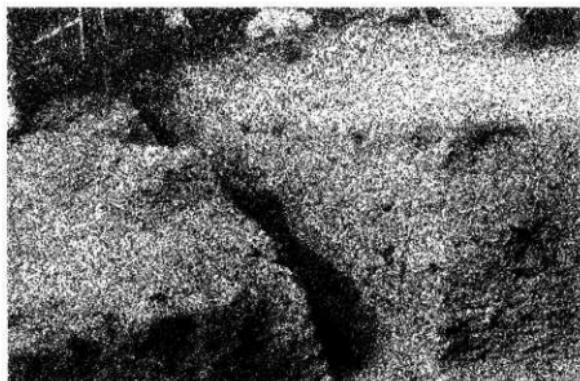
遠景（南西から）



遠景（南東から）



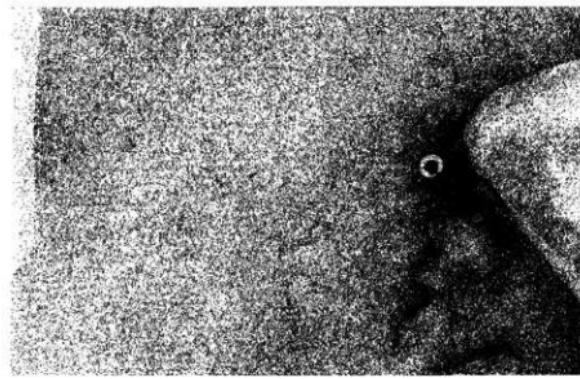
調査以前



填丘土層断面  
(A - B)



填丘土層断面  
(C - D)



遺物出土状况

遺物出土狀況



西側 側壁



東側 側壁





西側 側壁

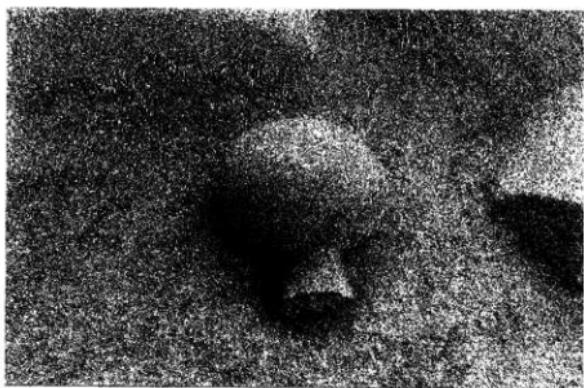


玄室



奥壁

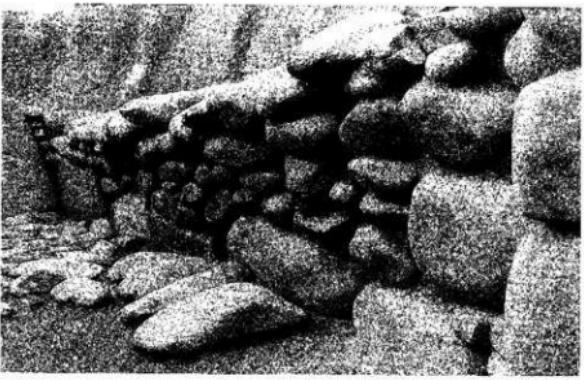
遺物出土狀況



西側 側壁

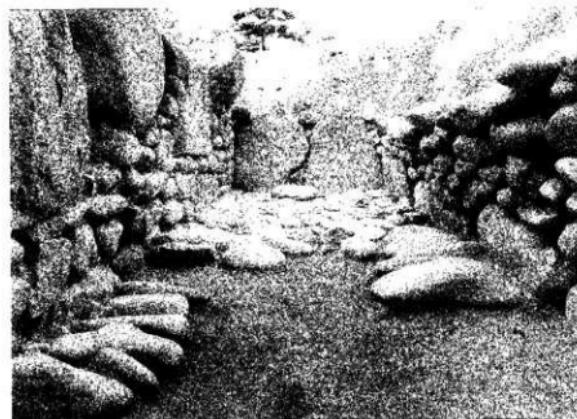


東側 側壁

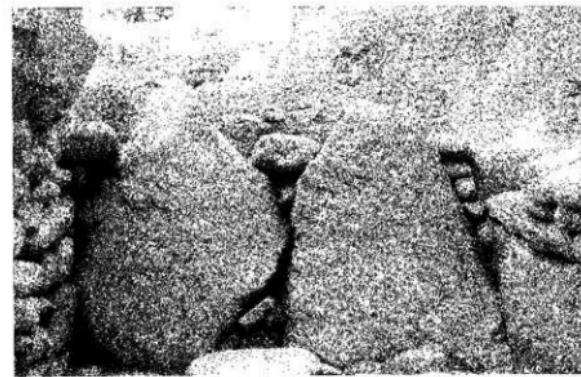




西側 側壁



玄室



奥壁



敷石



石室完掘状況  
(南東から)



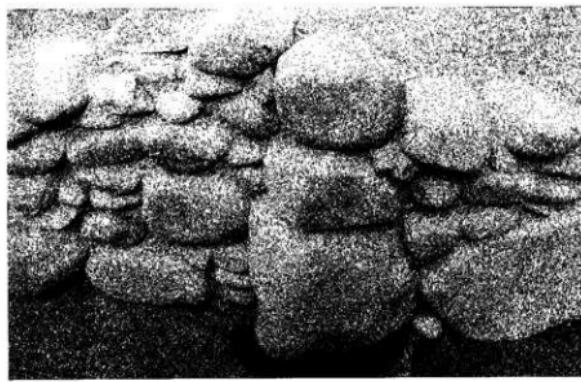
石室完掘状況  
(北西から)



石室完掘状況  
(敷石撤去後)



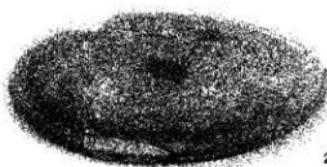
西側 側壁  
(敷石撤去後)



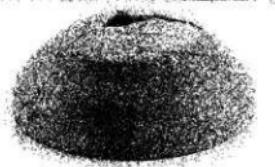
東側 側壁  
(敷石撤去後)



1



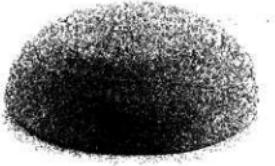
22



2



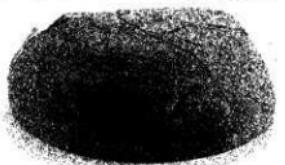
23



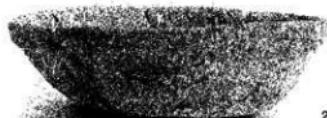
3



24



4



25



5



26



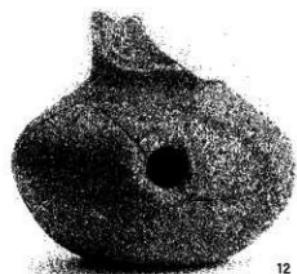
7



8



11



12



15



16



14



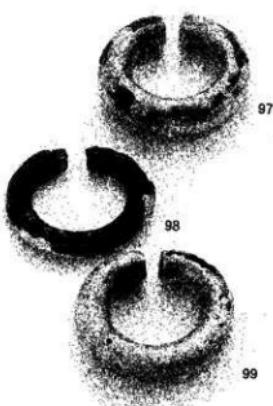
17



13



18



## 報告書抄録

ふりがな	りゆうまんやまこふんぐん 1ごうふん							
書名	龍満山古墳群 1号墳							
副書名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	藤田浩一郎, 川畑聰, 中西克也							
編集機関	香川町教育委員会							
所在地	〒761-1795 香川県香川郡香川町川東上 1865 番地 13 TEL 087(879)0231							
発行年月日	平成 15 年 9 月 30 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
龍満山 古墳群 1号墳	香川郡 香川町 川東下 東立満	37201		34° 14' 50"	134° 1' 50"	H14.9.18 ~ H14.11.15	230 m <sup>2</sup>	導水管 布設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
龍満山 古墳群 1号墳	古墳	古墳時代後期	墳丘 横穴式石室	須恵器, 土師器 耳環, ガラス玉 鉄器				

龍満山古墳群  
～1号墳～

編集 香川町教育委員会  
 香川県香川郡香川町川東上 1865 番地 13  
 発行 香川町教育委員会  
 高松市水道局  
 発行日 平成 15 年 9 月 30 日  
 印刷 有限会社 中央ファイリング

